

機関名	大阪大学	機関番号	14401	拠点番号	D08
1. 機関の代表者 (学長)	(ふりがなくローマ字) HIRANO TOSHIO (氏名) 平野俊夫				
2. 申請分野 (該当するものに○印)	A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> D<人文科学> E<学際、複合、新領域>				
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点 A Research Base for Conflict Studies in the Humanities				
研究分野及びキーワード	<研究分野: 文化人類学>(グローバル化)(グローバル・イシュー)(トランスナショナル・イシュー)(コミュニケーション)(地域間比較研究)				
4. 専攻等名	人間科学研究科人間科学専攻・グローバル人間学専攻、文学研究科文化表現論専攻、文化形態論専攻、コミュニケーションデザインセンター臨床部門(平成22年4月1日、臨床&フィールド・コミュニケーションデザイン部門から改組)、科学技術部門(平成22年4月1日、安全コミュニケーションデザイン部門から改組)、グローバルホレーションセンター研究推進部門、実践支援部門				
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)					
6. 事業推進担当者	21 名 ※他の大学等と連携した取組の場合: 拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [%]				
ふりがなくローマ字 氏名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)		
拠点リーダー KOIZUMI JUNJI 小泉潤二 (64)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授	文化人類学・中南米研究 Ph.D	全体総括		
KUDO MAYUMI 工藤 真由美 (62)	文学研究科(文化表現論専攻)・教授	言語学理論 言語学異論 博士	トランスナショナルリティ 言語接触とコンフリクト		
SHIBUYA KATSUMI 渋谷 勝己 (53)	文学研究科(文化動態論専攻(兼)文化表現論専攻)・教授	言語学理論 言語学異論 博士	言語接触とコンフリクト		
KODERA TSUKASA 棚府 司 (54)	文学研究科(文化動態論専攻(兼)文化表現論専攻)・教授	美術史・越境美術論 Doctor der Letteren	交錯するアートメディア		
ITO NOBUHIRO 伊東 信宏 (51)	文学研究科(文化表現論専攻)・教授	音楽学・中東音楽 修士	交錯するアートメディア		
MITANI KENJI 三谷 研爾 (50)	文学研究科(文化表現論専攻)・教授	ドイツ(語)文学 修士	交錯するアートメディア		
TOMIYAMA ICHIRO 富山 一郎 (54)	文学研究科(文化形態論専攻)・教授	社会思想学・日本学 博士	横断するポピュラーカルチャー		
KINSUI SATOSHI 金水 敏 (56)	文学研究科(文化表現論専攻)・教授	歴史言語学 言語学理論 博士	横断するポピュラーカルチャー		
TUJI DAISUKE 辻 大介 (46)	人間科学研究科(人間科学専攻)・准教授 (H21年4月1日追加)	コミュニケーション・デザイン研究 修士	横断するポピュラーカルチャー		
NAKAGAWA SATOSHI 中川 敏 (59)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授	社会人類学・東南アジア研究 Ph.D	トランスナショナルリティ		
IKEDA MITSUHO 池田 光穂 (55)	コミュニケーションデザイン・センター(臨床部門)・教授	医療人類学・中南米研究 修士	トランスナショナルリティ		
SHIMIZU KOKICHI 志水 宏吉 (52)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授	臨床教育学 博士	トランスナショナルリティ		
TOMOEDA TOSHIO 友枝 敏雄 (60)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授 (H20年4月1日追加)	社会学・社会運動学 修士	グローバリゼーション		
WOLFGANG SCHWENTKER ヴォルフガング・シュヴェントカー(58)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授	現代文明学 Ph.D	グローバリゼーション		
MUTA KAZUE 牟田 和恵 (55)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授 (H21年4月1日追加)	歴史社会学・ソング論 修士	グローバリゼーション		
NAKAMURA YASUhide 中村 安秀 (60)	人間科学研究科(グローバル人間学専攻)・教授	国際保健学・難民保健医療学 医学博士	人道と人権		
HIRASAWA YASUMASA 平沢 安政 (57)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授	多文化教育学 Ph.D	人道と人権		
KURIMOTO EISEI 栗本 英世 (55)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授	政治人類学・アフリカ研究 修士	人間の安全保障		
ATSUMI TOMOhide 渥美 公秀 (50)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授	地域共生論 災害支援論 Ph.D	人間の安全保障		
KOBAYASHI TADASHI 小林 傳司 (57)	コミュニケーションデザイン・センター(科学技術部門)・教授	科学技術社会学 修士	コンフリクトと価値		
NAKAOKA NARIFUMI 中岡 成文 (62)	文学研究科(文化形態論専攻)・教授	臨床哲学 修士	コンフリクトと価値		
SANADA SHINJI 真田 信治 (66)	文学研究科(文化表現論専攻)・教授 (H21年3月31日辞退)	社会言語学 言語学理論 博士	言語接触とコンフリクト		
KASUGA NAOKI 春日 直樹 (59)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授 (H22年3月31日辞退)	経済人類学・オセアニア研究 博士	トランスナショナルリティ		
KOUTOU YOUSUKE 厚東 洋輔 (66)	人間科学研究科(人間科学専攻)・教授 (H21年3月31日辞退)	社会学・モダニティ研究 博士	グローバリゼーション		
SOMEDA HIDEFUJI 染田 秀藤 (67)	人間科学研究科(グローバル人間学専攻)・教授 (H22年3月31日辞退)	ラテンアメリカ史・先住民問題 修士	グローバリゼーション		
MINE YOICHI 峯 陽一 (50)	グローバルホレーションセンター(研究推進部門)・准教授 (H22年3月31日辞退)	人間の安全保障・平和構築論 修士	人間の安全保障		
KUSAGO TAKAYOSHI 草郷 孝好 (50)	グローバルホレーションセンター(実践支援部門)・准教授 (H21年9月30日辞退)	人間開発学・開発経済学 Ph.D	人間の安全保障		
WASHIDA KIYOKAZU 鷺田 清一 (62)	総長 (H23年8月25日辞退)	臨床哲学・倫理学 修士	コンフリクトと価値		

機関（連携先機関）名	大阪大学
拠点のプログラム名称	コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点
中核となる専攻等名	人間科学研究科人間科学専攻
事業推進担当者	（拠点リーダー）小泉潤二 教授 外 20名
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>本グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」は、第一期の事業である21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」を継続再編して、「コンフリクトの人文科学」の研究教育拠点を形成するための第二期事業である。人類学を中心に、言語学、哲学、歴史学、芸術学、社会学などの基礎分野に加えて、国際協力学、人間開発学、教育学、人間の安全保障論等の実践分野が協働して研究教育拠点の構築を行う。</p> <p>社会的・文化的・民族的な対立と対抗関係の問題を分析し、その問題になんらかのかたちで対処することは、現代のグローバル世界における最も重要な課題の一つである。東西の冷戦構造が崩壊した1990年代以降、この課題は先鋭化すると同時に質的にも変化した。国家間、ブロック間、あるいは大イデオロギー間の比較的わかりやすい政治対立の図式から、きわめて多数の社会的・文化的・民族的集団が互いに複雑に絡まりあい、そこでは集団自身が急速に変化していくような流動的状況が生まれる中で、文化的、宗教的、社会的、経済的なレベルを含む様々な対立が様々に生起している。このように複雑化し流動化するコンフリクトの状況を理解するためには、その場に生きる人びとに焦点を合わせた現地調査に基づいた、綿密な、あるいは「厚い」現実理解が必須である。そのような対立や緊張を減じる方策があるとすれば、そうした理解を前提としなければならない。</p> <p>本拠点はこの課題に対し、人文社会科学の諸分野から貢献し、グローバルな次元におけるコンフリクトという問題に関する実践的研究を推進し、創造的に問題に取り組もうとする優秀な人材を育成することを目的とする。</p> <p>〔拠点形成計画及び達成状況の概要〕</p> <p>本拠点は、5年間の事業期間中に、84回の「コンフリクトの人文科学セミナー」、15回の国際シンポジウム・ワークショップ、多数の国内シンポジウム・ワークショップを主催したほか、事業推進担当者と特任教員・研究者を代表者とする公募制の研究プロジェクトを毎年20件前後採択し、研究を推進した。研究プロジェクトには、大阪大学以外の研究者も連携研究者としてメンバーに含むことができる。こうした事業を通じて、本拠点における、また本拠点をハブとする研究上のネットワークは飛躍的に拡大し、コンフリクトの人文科学に関する研究を推進する体制の構築は十分に達成されたと言える。人間科学研究科と文学研究科の大学院生には、以上の機会に積極的に参加するとともに、研究発表を行うことを奨励した。それとは別個に、両研究科の後期課程大学院生を対象とする公募制の競争的資金として、「大学院生調査研究助成」と「国際研究集会参加支援」の2種類を設置した。5年間で、のべ83名が助成を受け国内外で調査研究に従事し、のべ23名が支援を受けて国際研究集会で発表を行なった。これらの助成の対象については、本拠点を統括する運営会議（以下を参照）のメンバー全員が、科研の審査と同様の点数制の方式により厳格な審査を行って決定した。助成を受け調査研究を終了した院生には、毎年2回開催された報告会で成果を報告する義務を課した。この報告会は公開であり、両研究科の教員と大学院生が参加し、討論に従事した。これらを通じて、若手研究者の研究能力・発表能力は確実に向上し、研究の質が向上したと言える。本拠点のプロジェクトは多岐にわたったが、拡散することなく発展させるため、「グローバルな次元におけるコンフリクトに関する実践的研究を推進し、この問題と創造的に取り組む優秀な人材を育成する」という基本路線を堅持した。この目的のために、プログラム全体を統括する役割は、拠点リーダーと拠点サブリーダー兼事務局長を含み、事業推進担当者の約三分の一のメンバーで構成される運営会議が担った。プロジェクトの公募様式の策定や選考も、すべて運営会議が行なった。運営会議の方針は、毎年年度始めに開催され、事業推進担当者と特任教員・研究員の全員と、他大学の研究者を含む連携研修者の一部が参加した全体会議で審議され、承認された。研究成果を発表し、研究を推進するメディアとして、本拠点は機関誌『コンフリクトの人文科学』全5号を編集し、大阪大学出版会から刊行した。特別号として国際会議の報告書である英文論文集も刊行した。また、最終年度末には、5年間の成果のとりまとめとして、叢書『コンフリクトの人文科学』全4巻を大阪大学出版会から刊行した。個別の研究プロジェクトが商業出版社から刊行した学術論文集や、事業推進担当者と若手研究者が刊行した学術論文はきわめて多数にのぼる。以上のことから、当初の拠点形成計画は十分に達成されたと判断する。</p>	

6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

- ・ 15回の国際会議を主催し、約20か国の約80名の卓越した研究者を招聘し、研究発表を行うとともに国際的な人的ネットワークを構築した。なかでも重要なのは以下の国際会議である。
 - *Globalization, Difference, and Human Security* (平成20年3月 大阪)
 - *WCAA OSAKA 2008: Conflict, Cooperation, and Anthropologies' Role in the World* (2008年7月 大阪)
 - *Migration and Identities: Conflict and the New Horizon* (平成20年8月 サンパウロ/大阪)
 - *Reframing Development: Post-Development, Globalization, and the Human Condition* (平成21年4月 大阪)
 - *Aproximación Interdisciplinaria a los Conflictos en torno a los Discursos Andinos* (平成21年12月 大阪)
 - *Globalization and Conflict: Entanglement between Local and Cosmopolitan Orientations* (平成22年9月 グローニンゲン)
 - *Translational Movements: Ethnographic Engagements with Technocultural Practices* (平成24年3月 大阪)

上記のうち、WCAA OSAKA 2008 は、人類学世界協議会 (WCAA - World Council of Anthropological Associations <http://www.wcaanet.org/>) の全体会議を本拠点が主催し、協議会の加盟学会の学会長らが国際協力のために集まったものである。

Migration and Identities はサンパウロ大学との共同で開催し、成果を *Conflict Studies in the Humanities* (Special Issue: Migration and Identities: Conflict and the New Horizon) として英文で出版した。

Globalization and Conflict は第10回大阪大学フォーラムとして、本拠点の拠点リーダーを代表者として本拠点が組織することにより、オランダのグローニンゲン大学で開催された。

これらの活動を通じて、大阪大学とグローニンゲン大学 (オランダ) およびサンパウロ大学 (ブラジル) とのあいだの学術交流の発展に貢献した。

- ・ 「コンフリクトの人文科学セミナー」を合計84回開催し、そのうち35回は海外から招聘した第一線の研究者が講師だった。講師の出身国は、欧米からアジア、アフリカ、ラテンアメリカまで全世界に及び、真にグローバルなネットワークが形成された。
- ・ 本拠点による大学院生調査研究助成は81件に達し、そのうち56件は欧米、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなど世界各地で実施された。
- ・ 人間科学研究科と文学研究科の博士後期課程大学院生による国際研究集会での発表件数は、平成19年度の42件から平成23年度には85件に増加し、5年間の合計も320件に達した。
- ・ 本拠点の研究プロジェクト「排外的ナショナリズムと暴力に関するジェンダーパースペクティブによる研究：コンフリクトの回避と解決のために」の成果は、英文論文集 *The Gender Politics of War Memory: Asia-Pacific and Beyond* として、大阪大学出版会から刊行された。
- ・ 本拠点の活動を基盤として、拠点リーダーは平成20年-21年に人類学会世界協議会 (WCAA: World Council of Anthropological Associations) の会長を務めた。また平成21年以降は国際人類民族科学連合 (IUAES: International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) の事務局長を務めている。
- ・ 平成21年9月にフランクフルトで開かれたドイツ人類学会では、本拠点の拠点リーダーが全体基調講演者として招待された。
- ・ 平成23年に西オーストラリア大学で開催された国際人類民族科学連合の中間会議では、本拠点が分科会 *Globalization and Conflict* を組織した。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	大阪大学	拠点番号	D08
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称	コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点		
中核となる専攻等名	人間科学研究科人間科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)小泉 潤二		外 20 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は概ね達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援については、総長を中心とする組織的なガバナンスのもと、21世紀COEプログラム以降の継続的な戦略が練られ、本拠点は大学の将来構想の中に、明確かつ重要な位置付けを得つつ、プログラム遂行に当たって全学的な支援を受けており、具体的な研究成果と各種の連携が生まれている。

拠点形成全体については、国際学会、セミナーの開催等により、グローバル化の中で生じるコンフリクトを理解するための新たな国際教育研究拠点形成の第一歩を踏み出すことができた。しかしながら、拠点形成のための独創的な工夫や博士課程学生レベルでの他機関との交流については、さらなる努力が必要である。

人材育成面については、新しい大学院高度副プログラムとして「グローバル化とコンフリクト」が開講されるなど、研究者養成のために、従来になかったきめ細かい指導が行われているが、若手研究者がキャリアの足がかりを固める拠点を形成するには、さらに効果的な仕組みの構築が期待される。

研究活動面については、国際会議の開催、叢書の刊行など、積極的な研究活動が行われたが、博士課程学生の研究成果を充実させるための一層の努力が望まれる。「グローバル化とコンフリクト」、「コンフリクト研究」というテーマがユニークであるだけに、研究領域として認知されたかどうかについて、依然として不明な部分がある。今後は研究内容を収斂し、このテーマについて継続的に発信していくことが求められる。

今後の展望については、大学院カリキュラムの中に本プログラムに係る科目が作られたこと、及び博士課程教育リーディングプログラムの採択等により、持続的な展開が可能な枠組みが作られている。

コンフリクト研究という新たな分野に取り組み、人文学的な総合研究の基礎固めに挑戦した点は評価できる。しかしながら、今後の躍進のためには、研究内容の収斂を図り、理論の構築・具体的な問題解決への提言の双方で、大学内でも、国際的にも、発展させていく必要がある。